

神戸税関附近の秋の植物

岡村はた

9月6日前から希望されていた農大の浜田教授が六甲山植物採集にゆくべく来られた。この機会に室井先生は同教授を税関構内まで案内されたので私も同伴した。午前中の予定でざつと一巡するのである。

東遊園地は春とはちがい、すっかり下草が刈り取られて芝の上に転ぶと向うまですいて見える程、整然と刈りとられている。それでも芝生と間道との境にはスズメガヤ、オヒシバ、メヒシバ、セイヨウタンポポ、スベリヒユ、コシキソウ、コウベナズナ(マメグンバイナズナ)、クローバ、ニワヤナギ、ヤハズソウ等の矮生の植物が乾燥と刈り込みにたえてよく繁茂していた。又少し凹んだ所にはエノコログサ、ヨモギ、ツユクサ、アオザ、アレチノギク、カモジグサ、トウゴマ等が群をつくっている。東遊園地は春に比べて余りにも単純であつた。

グラウンドを北西にまわりぬけようとする所にニウウルシの大きなのがあつた。その辺でクルマバザクロソウを得た。グラウンドの北のまだ「刈り込み」に侵されていない所にはアメリカセンダングサ、アキノノグシが元気よく育っていた。道路の北側の焼跡にはダイズ、トウゴマ等がこぼれ種からの余命を保っていた。浜田教授はイヌムギ、スズメガヤの果実を採集された。

此所を西にぬけると、以前5月に訪れた時直径20cm位のコンクリートとレンガの破片で凸凹であつた所に出る筈なのに此所はまた何と様子が変つた事か。きれいに柵がつくれ地ならしされた赤土のテニスコートが2つ。然しその北の数百坪はそのままバラックが不規則に林立している。この辺の土は肥えているらしくトウゴマ、ホナガイヌビユ、アオビユ、オナモミ、ヘラオオバコ、イヌホオヅキ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ブタクサ等がバラック小屋よりも高く繁つていた。

道路をへだてた西はこの春、ジョンソングラス即ちジョンソンモロコシと室井先生の命名された高さ2m位の帰化のモロコシが株の直径3m位にもなり叢生し一杯に実をつけていた。私達は喜んで早速これを採種した。

南に出て、春と同じ様にコンクリートわくの海岸辺の狭い畑に出た。此所も春の盛況さどちがい緑が極めて少い。唯クニンシンの青さが目立つた。この辺をしばらく右往左往してムギクサの穂をさがしたが一種

も採集する事が出来なかつたのは残念であつた。畑のふちの辺にメナモミ、ヨモギ、アメリカアリタソウ、ホウキギクがみられた。湿気の多い所にはコゴメカヤツリ、イヌタデ等もあつた。

次に道を東へとり、外人墓地の東の焼野ケ原に出た。オオマツヨイグサの大群落がみられ花盛りである。といつてもあまり昼間は美しくない。又アレチマツヨイの盛りすぎた株が方々に立つている。この種はオオマツヨイグサより一ヶ月位花期が早いらしい。もう既に実がよく熟している。コマツヨイも地に這い花期がすぎ小さい花が所々に残り咲きしている程度であつた。又ブタクサ、アオザの咲き残りが少々あり、タカサブロウは細葉品ばかりであつた。

次に荷車線路を南にわたり遂に最も浜に近い東西の大通りに出た。此所を更に東にゆく。道路以外の空地は皆砂地である。この辺でシナガワハギ、ハマヒルガオ、ニシキソウの矮生のをみる。三菱倉庫と倉庫との間の開けた所を右即ち南におれると、つき当りに「禁煙」と大きく壁面一杯に書かれてある。「殺風景な所だなア」と思つて辺を見廻していると、室井先生が大きな声で「クリノイガを再発見した。」と言われた。あまりの先生のよろこびに私達も本当に愉快になつた。今までの採集物が少く不満であつたのも何所かへ消えた。これが如何に珍品かはよくわからないがとにかく奇異な綱のする植物である。ここで発見されたのは1mあまりの匍匐茎を持つもの2株であつたが、これを幾つかに切つて野冊におさめた。

再びアスファルト道路を東へ進む。途中、帰化したと思われるカラスノゴマ科の草一株(黄色花)と、木本一株(再び10月に訪れ、持ち帰ろうとしたのであつたが倉庫火災後の整理のため近づく事が出来ずのみが果せなかつたのは残念だつた。)何時のまにか大通りはとぎれてしまつて道は大きく3つにわかれていた。その東は漠々たる砂地でイヌホオヅキ、アメリカアリタソウの緑が目立っていてイネ科は面積は広いがおとろえた綱で、ロゼット型のスズメガヤが群落をつくり所々に大きいミズビユ、シロバナオオイヌタデ、チヨウセンアサガオ等がみられた。これ等の群落どしに濁がみえる。そのむこうはコンクリートの防波堤で仕切られていて濁は200m平方である。これは海にコンクリート堤の下を通して直通しているらしく潮の干満がみられる。

先すまわりの砂地には別にかわつたものはみられない。植物の種類の数も少く、イネ科のスズメガヤが優勢で、エノキグサ、ピロウドエノキグサ、チヨウセンアサガオ、ツユクサ等である。3m程足下は急に低くなつてゐる。湯の北、西側は都市から流下して来る泥ごみで砂が全くおおわれて一見何も生えていない様に見える。然し東は狭くはあるが砂があらわれていて自然の浜の綱がある。

私達は先ず、下水の流れこむ側、即ち北西からその黒い泥でおおわれた砂の上におりた。泥は海岸線まで現在7~8m内外つづいてゐる。よく見ると半分砂泥に埋まつた様なオカヒジキ、インボウキ、ハマアカザ、ハマゴウ、マツナ等が数本ずつ海岸線に平行に線状に並んでゐる。此所は然しもつと以前には多くの海浜植物が工場や都市からの有害な成分の水にもまれながら、相当長期間、隔離され独立し、まとまつた海浜植物群落地帯であつたにちがいない。然し最近埋め立てが大規模に進められて、これ等の群落の余命も幾らもあるまい。この工事短期間で東防波堤まで達するだろう。そうすればこれ等の純然たる海浜植物は旧市内から全く姿を消すのである。然し少くとも昭和27年秋までは残つてゐたことを記録しておきたい。

私達は黒色の泥地をしばらく歩きまわつた。ホンバノハマアカザ、オカヒジキ、ハマホオキギ、インボウキ等の葉はすべてこの黒泥にうすくつつまれており、根は始終泥水であらわれている。その他数種の海浜植物をみとめた。この黒泥地の東は比較的ひらけた砂地で、カモノハシ、ハマエノコロ、ヒエガエリ、クリノイガ等矮生ではあるが個体数が比較的少かつた。この砂浜を一巡して東側防波堤の上を北方へ歩き、三宮駅に出た。(Sept. 6. 1952.)

(188頁より続く)

その葉には一見明らかでないが注意して検査すれば必ず検証し得られる。格子目あることにより別種とすべきであると考え。

〔望井云〕 ムンロー氏の説が正しく格子目は共に欠けている。Bambusa puberula Miq. = Phyllostachys nigra Munro

最後に不完全な検査表がついてゐる。即ち稈、枝が円形で扁平の少い竹の部

◎雄蕊3本……………Arundinaria japonica (ヤダケ)

◎雄蕊6本

葉は25~40mm×15~30mm……………Bambusa senanensis (タカヤマササ)

葉は4~20mm×5~20mm

格子目なし

秋の植物目録(主なもの)

イネ科

スズメガヤ *Eragrostis megstachya* Link

ヒエガエリ *Setaria viridis* Beauv.

for. *pachystachys* Makino

ナス科

チヨウセンアサガオ *Datura Tatura* L.

クマツヅラ科

ハマゴウ *Vitex rotundifolia* L.

アカバナ科

コマツヨイグサ *Oenothera laciniata* Hill

カラスノゴマ科

2 spp.

タカトウダイ科

ピロウドエノキグサ *Acalypha australis* L.

var. *velutina* Honda

コシキソウ *Chamaesyce maculata* Small

ザクロソウ科

クルマバザクロソウ *Mollugo verticillata* L.

ヒユ科

ホナガイヌビユ

アカザ科

ハマアカザ(コハマアカザ) *Artiplex subcordata* Kitagawa

ホンバノハマアカザ *A. subcordata* Kitagawa var. *japonica* Honda

アメリカアリタソウ *Chenopodium ambrosioides* L. var. *anthermiticum* Gray

インボウキ *Kochia scoparia* Schrader

オカヒジキ(ミルナ) *Salsola Komarovii* Iljin

マツナ *Suaeda asparagoides* Makino

以上

葉裏有毛……………B. nana (ホウオウチク)

葉の両側全然無毛…B. aurea (ホテイチク)

格子目あり……………B. pygmaea (オロシマチク)

……………B. variegata (チゴササ)

……………B. Chino (アズマネササ)

……………B. floribanda (チンチク)

〔室井云〕 上の検索表は至つておおまかなもので格子目があると云う中にチンチクが入つたり、ホテイチクとホウオウチクが近似種の様に比較されたりしてゐる。

× × ×

以上フランチェ、サヴァチエル両氏の研究の結果が現在の分類学上より見てどうかと言うよりも両氏の観察態度が実に立派でツンペルリ氏より其の時代の差異がはつきり表われている事が何より面白く感じられる。